近代の文学 9

中勘助の文学

渡辺外喜三

渡辺外喜三郎 著

中 勘 助 の 文 学

桜楓社

著者略歴

渡辺外喜三郎（わたなべ げきさぶろう）

大正11年大分県生。
昭和23年9月東京大学卒。
現在鹿児島大学教授。

中勘助の文学　　近代の文学9

昭和四十六年十月二十日　初版印刷
昭和四十六年十月二十五日　初版発行

定価　二八〇〇円

著者　渡辺外喜三郎
発行者　及川篤二
印刷所　第一印刷所

101　東京都千代田区猿楽町二―二―六
(株)桜楓社
電話(〇三)二九一―五六六一
振替東京　一八〇二〇

3093―711081―0723

序にかえて

私が中勘助の『銀の匙』にはじめて接したのは、学徒兵として入隊する一年ばかし前であった。その頃のことを後に人々は暗い谷間と呼んでいるが、私はその谷間のなかにいて『銀の匙』の世界に引きこまれていった。この小説の何処に一体魅了されたのか、当時の私にはよくわからなかったけれど、今にして思えば、それは、生きる苦悩を知りはじめた『銀の匙』の少年の静かにして自由な美しい世界への憧憬が、現実の暗さのなかに眠っていた私の琴線にふれたためかもしれない。

敗戦直後、私はしばらく山のなかの小さな小学校の宿直室で自炊生活をし、その後、上京して再び大学に学んだのであるが、その頃の混乱と窮乏を今更ことごとしくは書かないけれど、中勘助の何冊かの随筆集はその苦しい時の私の何よりの心の支えとなってくれた。『銀の匙』は勿論のこと、この随筆も汚濁に染まぬ孤高の詩人にふさわしい静かな美しい作品として高く評価されているけれども、そして、まさしくその通りだけれど、この時、私の心の支えとなったのは、その静けさ美しさが、苦難のなかに築きあげられた、何人もそれを奪うことも犯すこともできないものであることを、次第に知るようになったからである。おそらく、『銀の匙』以来の憧憬であった自由にして静かな美しい世界を彼が空想や幻想の世界においてのみ実現したのならば、私はそれを心の支えとすることはできなかったであろう。

『街路樹』のなかで彼は、「私は詩をつくることより詩を生活することに忙しかつたやうにみえる」と言っている

が、現実生活においてその静かにして自由な美しい世界を築きあげようとするのは並大抵のことではない。その苦難をここで多く語ることはできないが、たとえば、彼の家族に対する深い愛情が彼に旧家族制度およびその道徳にきびしい批判をなさしめていることなどもその一つである。お互いを大事にしあう静かな楽しい家庭の実現を望んでいる彼が、現実に見るわが家の地獄図に堪えつづけた三十年の月日のなかから、その不幸の最大の原因として見出したものは、同一家族のなかに絶対者と服従者を人為的に作りあげてあやしまないような非近代的な制度や道徳が許されているということであった。家の重荷を背負い苦しんだ挙句に発した彼のこの批判は、机上のものでないだけにはげしく、また確信にみちたものであった。

中勘助はひとも知る静かな詩人である。その人が、時もあろうに、この旧家族制度を万邦無比の精華とうたいあげていた第二次世界大戦中に、それを批判し否定したのであるから、私はこの人を単に静寂孤独を愛する脱俗の一詩人と見ることができない。昭和十六年七月の随筆に、「ある人は私に凄しいけんまくで問ひかけた。右か、左か、現代ははつきりした答へを要求すると。上だ！　とそこで私は答へた」と書いているが、何かといえば右か左かばかりを穿鑿したがる人間の貧弱愚劣さに対する臓腑にしみわたる叱咤ではないか。彼はこの言葉のごとく常に上に向って歩いている不屈の詩人である。

私は今、彼の歩いた苦難の一例をあげたのであるが、このほかに人間の生死の問題、愛情の問題、また更にあの純美な『鳥の物語』の世界なぞにもふれたいのだけれど、もうそれを語る余裕はない。ただ、俗流に染まず向上の一路をとぼとぼとたどる彼の孤影のかたわらに、西欧のすぐれた文学者の背後に常にイエス・キリストがあるごとく、常に仏陀の姿があることを附言しておく。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

徳孤ならずという言葉があるが、文壇やジャーナリズムの流行を意に介せずひたすら淋しくわが道を歩きつづけたこの詩人に心を寄せ、その清澄にして貴品にみちた世界を、敬愛の情をもって、大事に見まもっている人々は意外に多い。私はまた、この詩人の老境を実に見事なありがたいものに思っているが、あたかもその大きなしるしでもあるかのごとく、角川書店からこの夏りっぱな全集が出版された。名利を願わず、もっぱら無私の愛に生きたこの地味な作家のおそらく想像もしなかったであろう喜びが、この全集にはこめられているような気がする。

昭和三十七年秋

昭和三十七年の秋、私は「中勘助の世界」という短文を朝日新聞に寄せた。その時の私には、中勘助全集が出版されたという喜びがあったけれど、再びその同じ人のことを書こうとしている今の私には、ただ悲しみが――大木が倒れ、あかりが消えたという切ない思いが――あるだけだ。

憲法記念日だった一昨日の午後三時半に、「ナカカンスケキトク」のしらせがあってから、私の心は落着きを失ってしまっているが、これは、中勘助が若い頃から常に死に向い合って生きた人であることをよく知っているはずの私には、何よりも恥ずかしいことであった。「どん栗の落るばかりぞ泣くな人」という辞世の句をよんで、「あいにく今度は役に立たなかったからこのつぎお迎ひがきた時にはこれで間に合せようと思ふ」と、九年前の大病の後に書いて

いる、そのような人の死に、私は泣いてはならないはずであった。

しかし、それは、その死があまりにも思いがけなく、何の予告もなしに襲いかかって来たためだと、私は言いたいのだけれど。「……彼岸もすぎて快適の季節になった。花もさいた。若葉ももえた。手当り次第に書物を取出し気まかせに読んで日を暮す。ささやかな楽園である」という元気な文章を十日ほど前の「このごろ」（朝日新聞四月二十二日）に見出した時の喜びと、それは重なっているからだ。

こんなことを長々と書いていても仕方がないので、中勘助の文学について何か書かねばと思う。御承知のように、この正月、この文学者は大仏次郎、棟方志功、丹下健三、その他の方々とならんで朝日賞を受けた。先に角川書店から十二巻の全集が出、その文学上の功績が朝日賞受賞の対象になったということは、それが時流に染まず、文壇の喧噪から遠ざかった静かな仕事であるだけに、その意義は大きく、喜びもひとしお深いものであった。——しかし、それが死出の旅のはなむけになろうとは！

そして、その受賞によって、人々は彼の名を知り、彼の文学の何たるかをよりはっきり知ることができたと思う。だから、その時の彼の文学に対する賛辞を思い起してもらえばいいのであるが、蛇足をおそれず思いつくままに彼の文学の一端を語ってみよう。

中勘助は一高、東大時代の夏目漱石から教えをうけた一人で、しかも、彼の作品中おそらく一番よく読まれている『銀の匙』（岩波文庫）は漱石の推薦で朝日新聞に連載されているのだけれど、彼自身はいまだかつて漱石門下を誇称したことがない。彼は常にそのことにふれる時、その末席を汚すものとわずかに言っているにすぎない。従って、世間もそう思い込んでいたなかで、戦前既に早く——昭和十年秋——辰野隆が漱石門下の三羽烏として寺田寅彦、鈴木

三重吉、中勘助の名をあげている（「吉村冬彦論」）ことはたいへんな卓見である。また、これは戦後――昭和二十七年ごろ――になるけれども、杉森久英が漱石の精神をしんに受けついでいる文学者として志賀直哉と中勘助をあげている（「随筆文学」）が、これは辰野隆の卓見を更に抜く素晴らしい見識だと私は思っている。

漱石文学の特長をその潔癖性に見る時、その継承を志賀直哉と中勘助に見出した眼力に敬意を表し、それに共鳴したうえで、私は漱石の苦悩の文学は、志賀文学ではなく、中文学に受けつがれていると付け加えたい。人も知るとおり、志賀直哉は理想派「白樺」の重鎮で、その人間肯定の明るさは実に見事だけれど、それが漱石のあの暗い苦悩とどのようにかかわり合うかということになると、私はそこにはっきりと異質のものを感ずる。それに反して中勘助は、晩年の漱石の暗い人生観をうけついだ苦悩の文学者だと思う。

十何年前になるが、話がたまたま『暗夜行路』のことにふれた時、中勘助が「志賀さんの暗夜行路はさして暗くないね」と笑いながら言ったことがあるが、それは苦悩の違い、暗さの質の違いを言ったのではないかと、今になって私は思う。中勘助の暗さは、明るさを求めつづけた漱石の暗さと同質のものではなかったか、と。その暗い苦悩を超克するための苦闘が、『銀の匙』を書いてからの約十年間の放浪孤独の沈黙となったり、旧家族制度およびその道徳とのきびしい対決となったり、仏陀の慈悲に生きようとする決意になったりしているのである。そして、そこから彼の静かな文学が生れている。

だから、その静かなところだけを見ていると、彼が漱石の苦悩を継承し、それと苦闘した文学者であることを見落してしまうけれども、しかし、よく見れば、その底にある苦悩の深さに身のひきしまるのをおぼえるであろう。その暗い苦悩を克服して明るい世界に出ようとする彼の姿には、単なる文学者には見られない哲人の面影があった。

昭和四十年五月

中勘助の文学

目次

序にかえて……一
孤高の詩人の思想……一三
小説から童話へ……三〇
親しい人々の生涯……五三
愛すればこそ……七九
「銀の匙」前篇……九六
「銀の匙」後篇……一一六
漱石と勘助と三重吉――「銀の匙」をめぐって――……一三六
「銀の匙」の暗面……一四七
学生時代……一五六
「病床」前後……一六五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

軍隊生活……一七四
「島守」……一八一
「郊外 その一」……一八九
「妹の死」……一九五
「銀の匙」執筆の頃……一九九
「孟宗の蔭」……二〇二
「郊外 その二」……二三二
「提婆達多」をめぐって……二三七
「沼のほとり」……二五五
「東京」……二七六
「しづかな流」……二八二

中勘助の文学

孤高の詩人の思想

『銀の匙』

中勘助の幼少年時代の姿は美しく『銀の匙』に物語られている。この幼少年時代の物語から直接その思想を汲みあげることは困難だけれども、中勘助の思想をさぐるための糸口が多くこのなかに隠されているという意味では、あくまでこれはその基本の骨格を示している作品である。

たとえば、かよわい『銀の匙』の子どもが夜あらわれる魔ものの世界におびえる一節にしても、それは幼き日の単なる思い出ではなく、この子どもの生長とともに形は変えながらも、彼を一生おびやかしつづける暗いかげと深くつながっており、そうした暗いかげから逃れたいという希望がそこにかくされているように思う。幼年期をすぎる頃には既に、髪をばさっとさげた夜の魔ものの恐怖からは逃れているけれども、それ以後、それとは別の自分をおびやかす暗い影の正体――自分をかくも不安にし混乱させるところの――を彼は見つめつづけているから。

また、『銀の匙』の子どもが「先生だつてやつぱり人間だと思ふ」ような生意気な少年になった頃、日清戦争が戦われているが、それにからんで次のような一節がある。

戦争が始まつて以来仲間の話は朝から晩まで大和魂とちやんちやん坊主でもちきつてゐる。それに先生までがいつしよになつて、まるで犬でもけしかけるやうな態度で、なんぞといへば大和魂とちやんちやん坊主をくりか

へす。私はそれを心から苦苦しく不愉快なことに思つた。先生は予讓や比干の話はおくびにも出さないで、のべつ幕なしに元寇と朝鮮征伐の話ばかりする。さうして唱歌といへば殺風景な戦争ものばかり歌はせて、面白くもない体操みたいな踊りをやらせる。それをまたみんなはむきになつて、眼のまへに不倶戴天のちやんちやん坊主が押寄せてきたかのやうに、肩をいからし肘を張つて雪駄の皮の破れるほどやけに足踏みをしながら、むんむと舞ひあがる埃のなかで節も調子もおかまひなしに怒鳴りたてる。私はこんな手合ひと歯するのを恥とするやうな気もちで、わざと彼らよりは一段高く調子をはづして歌つた。また唯さへ狭い運動場は加藤清正や北条時宗で鼻をつく始末で、弱虫はみんなちやんちやん坊主にされて首を斬られてゐる。町をあるけば絵草紙屋の店といふ店には千代紙やあね様づくしなどは影をかくして、到るところ鉄砲玉のはじけた汚らしい絵ばかりかかつてゐる。耳目にふれるところのものなにもかも私を腹立たしくする。ある時また大勢がひとつところにかたまつてききかじりの噂を種に凄しい戦争談に花を咲かせたときに、私は彼らと反対の意見を述べて　結局日本は支那に負けるだらう　といつた。この思ひがけない大胆な予言に彼らは暫くは目を見合はすばかりであつたが、やがてその笑止ながら殊勝な敵愾心はもはや組長の権威をも無視するまでにたかぶつて、ひとりの奴は仰山に

「あらあら。わりいな、わりいな」

といつた。他のひとりは拳固でちよいと鼻のさきをこすつてみせた。もうひとりは先生のまねをして

「おあいにくさま。日本人には大和魂があります」

といふ。私はより以上の反感と確信をもつて彼らの攻撃をひとりでひきうけながら

「きつと負ける。きつと負ける」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com